

氷の隊長と呼ばれた人が——私を組み敷いている。

赤く染まった瞳には、理性の色がどこにもない。首筋に刻まれた赤紫色の紋様が、鼓動に合わせて明滅している。

——この人を、こんなふうにしたのは私だ。

服を引き裂かれた。下着ごと、一気に。胸を鷲掴みにされて、先端に吸い付かれる。

「あっ♡ズんっ♡♡隊長っ……♡♡」

聞こえていない。止まらない。この人が自分で抑えようとしても、呪いがそれを許さない。

そのまま唇が下に降りていって、一番恥ずかしいところを舐められた。先端の敏感な箇所を吸い上げられて、入り口を舌でこじ開けられて、中に指まで入れられて——こんなの、知らない。知らないのに、頭が溶けそうだった。

うつ伏せにされて、腰を持ち上げられて、背後から一気に奥まで貫かれる。

「んあっ……♡♡♡」

容赦がなかった。いつも冷静で、無表情で、感情なんて見せない人だったのに。

何度も何度も、狂ったように奥を突かれる。

怖いと思うけど——私のせいで刻まれた呪いが、この人をこんなふうにしてしまったのだから——逃げるわけにはいかない。

そう決めたのに——執拗な責め立てに、身体の奥が熱くなっている。

「あっ♡んお~~~~ッ♡♡なんか、きちやうよ♡♡♡」

私は——この人に抱かれて、気持ちいいと思ってしまうている。

王国騎士団本部の廊下は、朝から騒がしかった。

今日は新人の配属発表の日。私もその一人として、掲示板の前に立っている。心臓がうるさい。

(——お願い……！ ルカ隊でありますように……！)

朝からもう何度心の中で唱えたかわからない。

第三部隊——通称「ルカ隊」。ルカ隊長は金髪碧眼の美丈夫で、誰にでも気さくで優しいと評判だ。入団式の時、緊張で転びそうになった私を「大丈夫？」と笑顔で助けてくれた人。あの笑顔が今でも頭に焼き付いていて忘れられない。

そもそも——私のような没落貴族の娘が騎士団に入れたのは、奇跡みたいなものなのだ。実家は借金まみれで、私が稼がなければ家

族が路頭に迷う——そんな状況をなんとかしようと、騎士募集の公募に飛びついたのだ。剣の腕はからっきしだけど、根性だけは誰も負けない。だからせめて、配属先だけは——

「おい、見ろよ。あいつ、第一部隊だってさ」

「わー……可哀想。鬼隊長のどこ？」

「ご愁傷様……」

周りがざわついている。通りすがりに私の方を見ていたが、きつと気のせいだと思ひ込むことにした。第一部隊——通称「カイル隊」。カイル隊長は王国最強の剣士にして、「氷の隊長」と呼ばれる男。無表情で、冷酷で、部下にも敵にも容赦がない。脱落者が一番多い部隊としても有名だ。

(……あ、あそこだけは嫌……！絶対に嫌だ……！)

震える指で、掲示板に貼られた紙を辿る。第三部隊——私の名前

はない。第二部隊——ない。第一部隊——

「……嘘」

私の名前が、はつきりとそこに書かれていた。

第一部隊の訓練場は、本部の最奥にあった。重い扉を開けると、広大な空間が広がっている。砂が敷き詰められた訓練場。壁には無数の剣や槍が掛けられている。空気がひんやりと冷たくて、砂の匂いが鼻をついた。そして——中央に、一人の男が立っていた。

紺色の長い髪を一つに編んでいる。銀色の瞳は、刃のように鋭い。無表情で、ただそこに立っているだけなのに、空気が凍りつくような威圧感。訓練場の広さが、この人一人で埋まっているみたいだ。

この人こそが——カイル隊長。

(……これが、氷の隊長……)

噂通りだ。いや、噂以上かもしれない。近づくだけで、背筋が伸びる。足が勝手に止まりそうになるのを、根性で前に一歩踏み出した。

「ほ、本日付けで第一部隊に配属されました！よろしくお願いします！」

声が裏返ってしまった。緊張で喉がカラカラだったから。でも、精一杯の笑顔を作る。第一印象は大事だ。

カイル隊長は、私を一瞥した。銀色の瞳が、値踏みするように上から下まで眺める。そして——

「……使えなさそうだな」

それだけ言って、くるりと私に背を向けた。

「え……」

(え？今、なんて……？聞き間違いじゃないよね？使えなさそうって言ったよね？)

「あの、隊長……？」

「お前の訓練は明日からだ。今日は見学してろ」

振り返りもしない。長い紺色の髪が、歩くたびに揺れている。

「見学って、どこを——」

「自分で考えろ。それすらできないなら、明日から来なくていい」  
冷たい声突き刺さる。私は、その場に立ち尽くした。

(……さ、最悪……！)

心の中で、拳を握りしめる。

(ルカ隊長のところ良かった……！ルカ隊長のところ良かった  
たあー！！なんでよりによって、こんな人のところに……！)

私は心の中で雄叫びをあげた。

その日の夕方。私は食堂の隅で、一人で夕食を食べていた。配属初日だというのに、誰とも話していない。第一部隊の先輩たちは皆さん訓練中は厳しい顔つきで、新人に構っている余裕はなさそうだった。パンを齧りながら、さっきの屈辱を思い出す。

（「使えなさそう」って何！？……まだ何もしてないのに……）

あの冷たい銀色の瞳。見下すような声。思い出すだけで腹が立つ。「おっ、噂の新人じゃん」

不意に、明るい声が降ってきた。顔を上げると——金髪碧眼の美丈夫が、にこにここと笑いながら立っていた。

「ル、ルカ隊長……！」

思わず立ち上がる。椅子ががたん、と音を立てた。

「そんな慌てなくていいって。座れ座れ」

ルカ隊長は向かいの席にどかっと座り、自分のトレイを置いた。パンとシチューが山盛りになっている。

「第一部隊に配属されたんだって？」

「は、はい……」

「カイルのところか。大変だな」

同情するような、でもどこか楽しそうな声。私は思わず愚痴をこぼしていた。

「初日から『使えなさそう』って言われました……まだ何もしてないのに……」

「あはは、カイルらしい」

「笑い事じゃないですよ！私、ルカ隊長のところに行きたかったのに……」

「え、俺のところ？」

「はい！入団式の時、助けていただいたじゃないですか。あの時から、ルカ隊長のところで頑張りたいって思ってたんです」

ルカ隊長は一瞬きよとんとして、それからくしゃつと笑った。

「そっか、ありがとな」

その笑顔が眩しい。やっぱりルカ隊長は優しい。

「でもな」

ルカ隊長は、少し真剣な顔になった。

「お前みたいなのはカイルのこの方が合ってると思うぞ」

「え……？」

「俺のところは、ぬるいんだよなあ」

「ぬるい、ですか？」

「俺、厳しくないタイプだから。みんな楽しそうにやってっけど、お前みたいなタイプが伸びるかって言われると……」

ルカ隊長は肩をすくめた。

「お前、騎士団に入った理由って何なの？」

「……家族を養うためです。実家が没落して、私が稼がないとってなあって……」

それが嫌で、騎士になることを決めた。両親にはもちろん猛反対されたけれど、背に腹はかえられなかった。

「だろ？ じゃあ、強くならなきゃいけない。生き残らなきゃいけない」

金色の瞳が、真っ直ぐに私を見る。

「カイルは厳しいけど、あいつのところまで最後まで残った奴は、絶

対に死なない。俺が保証する」

「……」

「まあ、きついと思うけどさ。お前、根性ありそうだから、大丈夫だろ」

ルカ隊長はまた、からっと笑った。私は何も言えなかった。慰められているのか、励まされているのか、よく分からなかった。ただ——この人は、私のことを見てくれている。そう思った。

翌日——本当の地獄が始まった。

「遅い」

訓練開始時刻の五分前に着いたのに、カイル隊長は既に訓練場に

いた。朝日が差し込む訓練場の中央に、腕を組んで立っている。

「お、おはようございます！」

「挨拶はいらない。剣を取れ」

言われるまま、壁に掛かった訓練用の剣を取る。ずしりと重い。握った瞬間に手首が悲鳴を上げた。こんなもの振り回せるのだろうか、私に。

「構えろ」

言われたとおりに構える。両手で柄を握って、教本に書いてあった通りに足を開いて——次の瞬間、視界が反転した。

「ぐえっ」

背中から地面に叩きつけられる。砂を盛大に吸い込んで、げほげほと咳き込んだ。何が起きたか分からなかった。カイル隊長は、ほんの少し腕を振っただけに見えた。それだけで私の身体が宙を舞っ

て、気がついたら砂の上に転がされていた。

「遅い。弱い。話にならない」

見下ろす銀色の瞳には、なんの感情も浮かんでいない。息すら乱れていない。私を転がすのに、この人は一切の労力を使っていない。

「立て」

立ち上がる。転んだ時に打ちつけてしまったのか、膝が震えている。

「構えろ」

もう一度、構える。今度はちゃんと見よう。どこから来るのか、どう動くのか——そう思っている間に、また地面に叩きつけられていた。

「ぐっ……」

今度は肩から落ちたせいで、鈍い痛みが全身に広がる。

——見えなかった。全然見えなかった。カイル隊長の剣が、どこをどう通って私の構えを崩したのか、その軌跡を何一つ捉えられなかった。

「何をしている。早く立て。戦場でそんなに悠長にしていられるの  
思うのか」

「……！」

悔しいけれど、カイル隊長の言っていることが正しい。私は、痛みを堪えて何とか立ち上がった。

けれど——

立つ。構える。転がされる。立つ。構える。転がされる。

十回。二十回。三十回。数えるのをやめた頃には、全身が痛みで悲鳴を上げていた。お尻が特にやばい。同じところばかり打ってしまった。当分椅子に座れないかもしれない。

「……今日はここまでだ」

カイル隊長が剣を下ろした時には、私は地面に這いつくばっていた。そんなに時間が経ったわけでもないのに、立ち上がる力も残っていない。視界がぼやける。涙なのか、汗なのか、分からない。口の中が砂でじやりじやりする。

「明日も同じ時間に来い。来なければ、それまでだ」

足音が遠ざかっていく。私は、砂の上に倒れたまま、空を見上げた。抜けるような青空。雲がゆっくり流れている。きれいだな、と思った。——現実逃避だ。

(……最悪だ。最悪、最悪、最悪……！)

こんな人の下で、やっていけるわけがない。心の底から、そう思った。

それから、地獄のような日々は続いた。毎日毎日、ボコボコに

される。立てなくなるまで転がされる。一度も、一太刀も、カイル隊長に届いたことがない。

「遅い」「弱い」「足がなっていない」「腰が引けている」「それで敵を倒せると思っっているのか」

カイル隊長からもらった言葉は全て罵倒ばかり。

褒められたことなんて、一度もない。いつも冷たい声で、欠点だけを指摘される。全身が青痣だらけで、ついには食欲さえなくなっ  
てしまった。疲労のせいとか何を食べても味がせず、食事がなかなか  
喉を通らなくなった。夜、自室のベッドに倒れ込むたびに、もう辞  
めたいと思った。でも辞められない。辞めたら知らないおじさんと  
結婚させられるし、断ったら家族が路頭に迷う。ここを逃げ出した  
らそんな未来しか私には残されていない。歯を食いしばって耐える  
しかなかった。

ある日の訓練後、いつものように砂まみれで訓練場を出ようとした時。先輩隊員——副官のダリウスが、訓練場の端で腕を組んでいるのに気づいた。三十代半ばの、がっしりした体格の男。この部隊でカイル隊長の次に強いと言われている人だ。どうやら私の訓練を見ていたらしい。

「……よく続くな」

声をかけられた。

「は、はあ………続いているというか、しがみついているだけというか………」

「それでいい。しがみつけるだけ大したもんだ。前の新人は三日で

辞めた。その前は一日だった」

「……それ、褒めてるんですか」

「褒めてる」

ダリウスがにっと笑った。険しい顔をしている人だと思っていたけど、笑うと意外と人間味がある。

「あと……一つ伝えておくと——」

「はい」

「隊長がこんなに長く自分で訓練を見てるのは、異例だぞ」

「……え？」

「最初は隊長が手ほどきする決まりだが、その後は俺とか部下が面倒をみる。隊長ほどの人間が新人に毎日訓練をつけるなんて、少なくとも俺が副官になってからは一度もない」

「……なんで、私だけ？」

「さあな。隊長の考えることは俺にも分からん。ただ、一つ言えるのは——あの人が興味のない人間に時間を使うことは、絶対にないってことだ」

その言葉が、妙に引っかかった。

(……興味？カイル隊長が、私に？毎日「遅い」「弱い」しか言わないあの人が?)

考えても分からなかった。でも、その日の夜は——少しだけ、ぐっすり眠れた気がする。

次の日——いつものように何度も転がされて、砂を吐きながら立ち上がった時、なかなか身体が起こすことができなかつた。全身が悲鳴をあげていて、限界だと訴えていた。腕も脚も鉛みたいに重い。視界がぐるぐる回っている。

(立たなきや……立たなきや……)

砂を掴んで身体を起こそうとするけど、腕が震えて崩れ落ちてしまふ。

「……立てないのか」

カイル隊長の声が降ってくる。いつもの冷たい声。

「……た、立てます……！」

嘘だった。もう立てない。でも、認めたくなかった。

「……今日はここまでだ。戻れ」

足音が遠ざかっていく。あまりの不甲斐なさに今度こそ本気で呆れられたのだろう——そう思ったのに、隊長の足が途中で止まった。

「……水を飲め。訓練場の隅に水瓶がある」

それだけ言って、今度こそ足音が遠ざかっていった。

(……え?)

いつもは「明日も同じ時間に来い」しか言わないのに。今日は

——水を飲み、と言ってくれた。たったそれだけのこと。でも、何日も訓練を受けてきて、初めてもらった罵倒以外の言葉だった。

這うようにして水瓶にたどり着いて、柄杓で水を飲んだ。冷たい水が喉を流れていく。身体中に染み渡って、美味しい。水ってこんなに美味しかったっけ。そんな当たり前のことに感動している自分がおかしくて、砂だらけの顔で、少しだけ笑った。

その夜、食堂でルカ隊長と会った。

「よっ、生きてた？」

いつもの挨拶。最近、ルカ隊長は気にかけてくれているのか、時々こうして声をかけてくれる。それが今の私にとっては唯一の救い

だった。

「ギリギリ生きてるって感じですよ……」

「あはは、毎回同じこと言うな」

ルカ隊長が向かいに座る。今日もトレイにはパンとシチューが山盛り。

「カイルの訓練、どう？」

「どうもこうも……毎日ボコボコにされて、立てなくなって終了です」

「まだ一太刀も当たらない？」

「当たるわけじゃないですか……あの人の動きが見えないんです。気づいたら転がされて」

「だろうな。カイルの剣は、王国でも上位三本に入る」

ルカ隊長がパンを千切りながら言う。

「つーか、本来あのレベルの剣士が新人の訓練つけるのって、贅沢すぎんだよな」

「……ダリウス副長にも言われました」

「だろ？ 普通は副官がやる。隊長は隊全体の指揮と、上層部との折衝で忙しいんだから」

「じゃあなんで、私にだけ……」

「さあ？」

ルカ隊長はにやっと笑った。

「聞いてみれば？ 本人に」

「聞けるわけないじゃないですか……！ あの人、必要なこと以外喋ってくれないんですよ」

「ははは」

ルカ隊長がシチューをすくいながら、何気なく言った。

「でもさ、今日カイルが俺に聞いてきたぞ」

「え？」

「『新人の食事量は足りているか』って」

「……え？」

「俺に聞くなよって思ったけどな。お前……最近痩せてきたから気にしてたんじゃねえの」

私は言葉を失った。

(カイル隊長が、私の食事量を気にしていた？あの、氷の隊長が?)

「気のせいかもしれないけど……あいつなりに、お前のこと気にかけてんじゃねえの」

その言葉を聞いた時、怒りでも悲しみでもない、よく分からない感覚で胸がいっぱいになった。

(……気にかけてる？あの人か？私を？)

信じられなかった。でも——信じたい自分もいるのも確かだった。

翌日の訓練は、雨だった。冷たい雨が訓練場に降り注ぐ中、カイ  
ル隊長はいつもの場所に立っていた。濡れた紺色の髪が額に張り付  
いている。それでも微動だにしない。まるで雨なんて降っていない  
かのようだ。

「……雨でも訓練は中止じゃないんですね」

「雨で敵が攻めてこないとでも思っているのか」

「……思いません」

「なら構えろ」

雨の中の訓練は、いつもよりきつかった。足元が滑る。剣が重い。視界が悪い。砂が泥に変わって、転がされるたびに全身が泥だらけになる。何度目かに転がされた時——立ち上がろうとして、足が滑った。

「っ——」

泥の中に顔から突っ込みそうになった瞬間、腕を掴まれた。

「……周りを見て動け」

カイル隊長の手だった。強い力で引き起こされる。一瞬だけ、至近距離で目が合った。銀色の瞳が、真っ直ぐに私を見ている。雨粒がカイル隊長の頬を伝って、顎から落ちる。近い——こんなに近くで見たのは初めてだった。睫毛に雨の雫がついている。

「怪我をされては訓練にならん」

すぐに手が離された。何事もなかったように、カイル隊長は元の

位置に戻っていく。

「構えろ」

すぐに訓練は再開された。

(……転びそうになるの……助けてくれた)

今まで何十回と転がされてきたのに、泥に顔から突っ込みそうになった時だけ——止めてくれた。

(怪我をされては訓練にならん、って……)

訓練のためだ。私のためじゃない。隊長はそう言った。でも。掴んでくれた手は大きくて、温かかった。咄嗟に手が出ただけなのかもしれないけれど、それでも心が浮ついてしまう。雨に冷えた身体に、あの一瞬の熱だけがはっきりと残っている。

大雨の中、やっと全ての訓練が終わって、びしょ濡れのまま訓練場を出ようとした時——

「待て」

ふいにカイル隊長に呼び止められた。振り返ると、カイル隊長が自分のマントを外していた。

「え——」

そのマントを、無言で私に投げてよこした。

「着替えるまでそれを羽織っている」

それだけ言って、隊長はマントなしで雨の中を歩いていった。自分は濡れたまま。紺色の髪から雫が落ちている背中を、私はぼうっと見つめていた。

受け取ったマントは大きい。カイル隊長の身体に合わせた、大きなマント。まだほんのりと温かくて、隊長の匂いがした。石鹸みtainな、清潔な匂い。冷えた身体が、じわりと温まっていく。

(……訓練のため、だよね)

きつと、風邪をひかれたら困るから——とかそんなの。それだけの理由。分かっている。分かっているけど——心臓がどきどきしている。(違う違う違う。あの人は最悪の上司。冷酷で、無愛想で、褒めてくれたことなんて一度もなくて——)

でも、水を飲めと言ってくれた。食事を気にしてくれていた。泥に顔をつける前に、掴んでくれた。雨の中、マントを貸してくれた。

(——全部、「訓練のため」なんだよね……?)

私は、マントの端をぎゅっと握りしめた。顔が熱い。雨で冷えるはずなのに、頬だけが燃えるように熱い。

分からない。隊長の考えていることなんて、全然分からない。

——そんなことでドキドキしている自分の気持ちは……もつと分からなかった。

昼休み、いつものように食堂で一人でパンを齧っていた時。同期の男性騎士が二人、私のテーブルに近づいてきた。

「なあ、お前第一部隊だろ？カイル隊長んとこの」

「……うん、そうだけど」

「毎日隊長に直接訓練つけてもらってるって本当か？」

「う、うん……まあ。一日の訓練のうち少しだけだけ……」

二人が顔を見合わせて、にやにや笑った。嫌な予感がした。

「いいよなあ、女ってだけで特別扱いされてさ」

「は？」

「だって、男の新人にはそんなことしないだろ。お前が女だから甘

やかされてんだよ」

頭に血が上がった。

(……甘やかされてる？ 毎日ボコボコにされて全身青痣だらけで、どこが甘やかされてるって言うの!?)

「隊長はそんな人じゃないよ。毎日死ぬほどきつい訓練——」

「でも辞めさせられてないじゃん。普通、お前くらい弱かったらとつくに外されてるだろ」

「それは——」

「女で没落気味とはいえ貴族出身のお嬢様だから隊長が気を使ってるんだよ。邪魔なのに置いてもらえてるだけありがたいと思えよ」

言い返そうとした。でも、言葉が出てこなかった。悔しくて、喉が詰まったからだ。弱いのは事実だ。一太刀も届いたことがないのも事実だ。でも、私は——

「——何の騒ぎだ」

低い声が、食堂に響いた。空気が凍った。文字通り、食堂にいた全員の動きが止まった。

振り返ると、食堂の入口にカイル隊長が立っていた。いつからそこにいたのか分からない。銀色の瞳が、同期の二人を射抜いている。殺気というほどではない。でも、あの目で見られたら——誰だって、足が竦む。

「カ、カイル隊長……」

二人の顔が、一瞬で青ざめた。

「俺の部隊の人事に口を出す暇があるなら、自分の訓練に集中したらどうだ」

それだけだった。声を荒げたわけでもない。怒鳴ったわけでもない。ただ事実を述べただけ。なのに——二人は「す、すみません」

と転がるように去っていった。

カイル隊長は、私を一瞥した。

「……食事を続けろ」

そう言って、自分もトレイを持って——食堂の反対側の席に座った。何事もなかったように、食事を始める。こちらを見ることもない。

(……助けてくれた?)

いや、助けたという意識はないんだろう。部隊の人事に口を出すな——それは隊長としての当然の指摘であって、私個人を守ったわけじゃない。

なのに、やっぱり嬉しいという感情が湧き出てくるのを止められなかった。

その日の夕方の自主訓練中に、ルカ隊長が訓練場に顔を出した。

「昼間、食堂で何かあったって聞いたけど」

「……噂ってすぐ広まるんですね」

「同期の奴らに絡まれたって？」

「大したことじゃないです。カイル隊長が来て、すぐ終わりましたし」

「カイルが来た？」

ルカ隊長の眉が上がった。

「カイルが食堂にいたのか？」

「はい。たまたま食事にいらっしやっただけで——」

「あいつ、食堂で飯食わないぞ」

「え？」

「いつも自室で食ってる。人が多い場所が苦手だから」

「……え？」

じゃあ、なんで——

「お前が絡まれてるの知って来たんじゃないやねえの？」

ルカ隊長がにやにや笑っている。

「そ、そんなわけ——」

「あいつは不器用だからな」

ルカ隊長が私の頭をぽんぽんと叩いた。大きな手。雑だけど、不思議と嫌な感じはしない。

「でも、本当は仲間想いのいい奴なんだぜ？」

(……ただの冷酷漢って思ってたのに……ホントは……?)

ルカ隊長が去った後、私はしばらくその場に立ち尽くしていた。

とはいえ、同期に「弱い」と指摘された事実は変わらないし、心の底から悔しかった。

自分が馬鹿にされるのはまだいい。それでカイル隊長まで「女だから舐肩してる」みたいに思われるのが嫌だった。だから——私は訓練が終わった後も自主訓練と称して、一人で素振りをしていた。全身が筋肉痛で悲鳴を上げているけど、止まったら負けだと思った。強くならなきゃ。生き残らなきゃ。家族を養わなきゃ。百回。二百回。三百回。腕が限界を訴えている。でも、ここで立ち止まっている時間はない。

「……まだやっているのか」

声に驚いて振り返ると、カイル隊長が訓練場の入り口に立っていた。夕日を背負って、長い影が訓練場の砂の上に伸びている。

「た、隊長……！」

「もう日が暮れるぞ」

「はい、でも、もう少しだけ……」

そう告げても、カイル隊長はなぜか帰らなかった。代わりに、ゆっくりと私の方へ歩いてきた。

「構えを見せてみる」

「え？」

「いいから」

言われるまま、剣を構える。カイル隊長が、私の後ろに回った。

「肘が上がりすぎだ。それでは力が入りきらない。もつと引け」

大きな手が、私の肘に触れた。心臓が、どきっと跳ねた。隊長の手のひらが熱い。そこから体温が流れ込んでくるみたいだ。

「腰も浮いているぞ。重心を落とせ」

腰に手が添えられる。指先が腰骨に触れて、息が止まりそうにな

った。顔に熱が集中していくのが自分でもわかった。

(……………なんで！？あんなに……………この人のことは苦手だったのに……………)

「足の幅をもう少し広く。そうだ。それでいい」

低い声が、耳元で響く。背中から、カイル隊長の体温を感じる。石鹼の匂いが鼻腔をくすぐる。マントの時と同じ匂い。心臓がうるさいくらいに鼓動を打っている。

「……………この構えを覚えろ。素振りをする時は必ず意識してやれ」

「は、はい……………」

「素振りの回数は半分でもいい。代わりに、一振りずつ丁寧に。数をこなせばいいというものではない」

「……………はい」

カイル隊長が、私から離れた。体温が遠ざかる。なぜか、それを

寂しいと思った。

「……隊長」

「なんだ」

「あの……ありがとうございます」

声が震えた。カイル隊長は、何も言わなかった。ただ、私の構えを直し終わると、静かに踵を返した。

「明日も同じ時間だ。遅れるな」

それだけ言って、訓練場を出ていく。夕日に照らされた紺色の髪が、揺れている。

私は、心臓を押さえて立ち尽くした。

(……なに、これ)

顔が熱い。胸がどきどきする。嫌いなはずなのに。苦手なはずなのに。でも、今日のカイル隊長は——厳しいだけじゃなかった。ち

やんと、教えてくれた。どうすればいいか、丁寧に直してくれた。

ルカ隊長の言葉が蘇る。

『本当は仲間想いのいい奴なんだぜ？』

(……ただ厳しいだけじゃないのかも)

私のことを、ちゃんと見てくれている。強くなれるように、育てようとしてくれている。そう思ったら——胸の奥が、きゅっとなった。

それから、私の中で何かが変わった。訓練は相変わらず地獄だった。毎日ボコボコにされて、立てなくなるまで転がされて、全身青痣だらけ。でも——カイル隊長を見る目が、変わっていた。剣を振

るう姿を、目で追ってしまふ。紺色の髪が揺れるのを、見つめてしまふ。銀色の瞳が私を見た時、心臓が跳ねる。

(……かっこいい)

認めたくなかったけど、認めるしかなかった。カイル隊長は、強くて、美しく、どうしようもなくかっこいい。氷のように冷たいと思っていたけど、違った。言葉は少ないけど、ちゃんと見てくれている。それに気づいてから、訓練が——少しだけ、ほんの少しだけ楽しくなった。この人の期待に応えたいと、そう思う。

「遅い」

また転がされる。砂を吐きながら立ち上がる。

「弱い」

また転がされる。今度は受け身を取れた。

「また腰が浮いてるぞ」

また転がされる。でも、さつきより長く持ちこたえた。

「……少しはマシになったようだな」

(え……?)

私が振り向いた時にはカイル隊長は、もう背を向けていた。でも確かに、聞こえた。「マシになった」って。褒められた——とは言えないかもしれない。でも、認めてもらえた気がした。嬉しくて、泣きそうだった。

「ありがとうございます!!」

「……礼を言ってる暇があるなら素振りの一本でもしろ。……強くなれ」

素っ気ない声。振り返りもしない。でも、「強くなれ」というその言葉がやけに耳に残った。

そうして少しずつ成長を感じられる日々が続いていたある日の訓練後のことだった。その日はいつもより長く持ちこたえられた。十五秒——自分の中では新記録だ。最後は転がされたけど、受け身もちゃんと取れた。——まだ立てないけれど。

カイル隊長が去った後、砂だらけの身体を起こして、剣を拾おうとした時、訓練場の入口に、ルカ隊長が立っているのが見えた。

「あ！ルカ隊長！」

「おー、終わった？ちょっと用事があったて来たんだけど」

ルカ隊長がこちらに歩いてくる。その笑顔に、思わずほっとする。

「お疲れ。今日も頑張ってたな」

「ありがとうございます！ルカ隊長に褒められると、報われます」

！」

「カイルは褒めてくれない？」

「『マシになった』を一回だけ言われました」

「あはは、それカイル的には最大級の褒め言葉だぞ」

ルカ隊長が笑いながら、私の頭の砂を払ってくれた。大きな手が、ぼんぽんと頭を叩く。

「砂だらけじゃん。ここ、ついてるぞ」

ルカ隊長の手が、私の頬についた砂を指で払ってくれた。ルカ隊長の顔が、すぐ目の前にある。金色の瞳が、きらきらと光っている。

「あ、ありがとうございます……」

(……なんか、ルカ隊長……近い……?)

「ん」

ルカ隊長はにこっと笑って――

「——ルカ」

低い声が、訓練場に響いた。びくっとして振り返る。カイル隊長が、訓練場の入り口に立っていた。いつからいたのか分からない。帰ったと思っていたのに。

「おー、カイル。忘れ物？」

ルカ隊長が、いつもの調子で手を上げる。

「……副官に渡す書類を忘れた」

カイル隊長の声は、いつも通り冷たい。いつも通りの無表情。でも——何かが違う気がした。銀色の瞳が、一瞬だけルカ隊長を睨みつけたような気がした。気のせいかもしれないが。

（……この二人……喧嘩でもしてるの？）

「書類なら副官室に届けとくよ。ほら、貸せ」

「……いい。自分で持っていく」

カイル隊長が、訓練場の隅に置いてあった書類を取って、足早に出ていると知る。

「あ、カイル。今度の合同訓練の件なんだけど——」  
「後にしろ」

ぶつりと遮って、カイル隊長は訓練場を出ていった。いつもより、歩く速度が速い。残されたルカ隊長が、にやにやしている。

「……機嫌わるう」

「いつも通りじゃないですか？」

「いや、いつもとは違うな。あれは——」

ルカ隊長が、口元に手を当てた。何か考えるような仕草。そして——にやっと笑った。

「……なんでもない」

「え、なんですか？」

「いや、なんでも」

意味ありげな笑顔を残して、ルカ隊長は去っていった。私は一人、訓練場に取り残された。

(……何だったんだろう、今の)

カイル隊長の態度が、いつもと違った気がした。

翌日の訓練は、いつもよりきつかった。いつもは三十回くらい転ばされたところで「今日はここまでだ」と言われるのに、今日は四十回を超えてもまだ続いている。四十一回。四十二回。四十三回。もう身体が限界だ。立ち上がるたびに膝が笑って、視界がぐらぐらする。

「立て」

いつもの声。でも、今日は——少しだけ、トゲがある気がする。

「た、隊長……今日、なんか……いつもよりハードじゃないですか……？」

「気のせいだ」

絶対気のせいじゃない。

「構えろ」

構える。でも、また次の瞬間、砂の上に転がされた。四十四回目。

(……なんで今日はこんなに厳しいの)

四十五回、四十六回——

「……今日はここまでだ」

やっと終わった。地面に大の字で倒れて、荒い息をつく。全身が痛い。指先まで震えている。カイル隊長が、剣を鞘に収める音が聞

こえた。

「……隊長」

「なんだ」

「今日、なんか怒って——」

「怒っていない」

不自然なくらいに即答だった。

「でも、いつもより——」

「お前が浮ついてるから、基礎を叩き直したただけだ」

「浮ついて……？」

「そうだ。集中力が散漫だった」

言われてみれば、今日は確かに集中できていなかったかもしれない。昨日のカイル隊長の態度とかルカ隊長とかの言葉が気になって、ずっと考えていたから。

「……すみません」

「謝るなら、明日は集中しろ」

足音が遠ざかっていく。私は砂の上に寝転がったまま、空を見上げた。

(……なんで……こんなにカイル隊長のことが気になるんだろう……?)

私は、カイル隊長のことが好きなんだろうか。毎日、顔を見るのが楽しみになっている。訓練でボコボコにされても、一緒にいられるだけで嬉しいと思っている自分がいる。雨の日にマントを貸してくれた時の温もりを、まだ覚えている。構えを直してくれた時の、背中から感じた体温を、忘れられない。

(……これは、好き、なんだろうか)

分からない。恋なんてしたことがない。没落貴族の娘で、毎日生

きるのに精一杯で、色恋なんて考える余裕がなかった。でも——  
（カイル隊長のことを考えると、やっぱり胸の奥がきゅっとなる）  
認めてしまったら、もう戻れない気がしていたけれど、でも、もう認めるしかなかった。

好きだと自覚してから、訓練がさらに地獄になった。いや、訓練自体は変わっていない。変わったのは、私の心臓だ。近づくだけでドキドキする。声を聞くだけでドキドキする。触れられたら——もう、頭が真っ白になる。

「構えが甘い」

カイル隊長の手が、私の腕に触れる。心臓が飛び出そうだ。

「っ……」

「どうした」

「な、なんでもありません！」

「顔が赤いが、熱でもあるのか」

「ないです！ いたって健康です！」

「……そうか」

怪訝そうな顔をされる。当たり前だ。挙動不審すぎる。自分でも分かってる。

（だって、好きな人に触られたら、普通じゃいられないでしょ……！）

心の中で叫ぶ。でも、そんなこと言えるわけがない。カイル隊長は、私のことなんか何とも思っていないんだから。

そんなふうに、訓練に私情を挟んでいた罰が当たることになる

は、この時の私は微塵も想像していなかった。

——初めての任務で、私の運命は大きく変わることになる。

第一部隊に、遺跡調査の任務が下りた。古い遺跡に魔物が住み着いているという報告があり、その調査と討伐が目的だった。

「この任務には、私も同行する」

カイル隊長がそう言った時、私の心臓は大きく跳ねた。隊長自らが出る任務。それだけ危険だということだ。でも——カイル隊長と一緒に任務に行ける。不謹慎だと分かっていても、嬉しかった。

任務のメンバーは、カイル隊長と私を含めて五人。先輩隊員が三人と、私。そしてカイル隊長。馬を走らせること半日。目的の遺跡に到着した。

「ここから先は徒歩だ。各自、警戒を怠るな」

カイル隊長の指示で、私たちは遺跡の中に足を踏み入れた。古い

石造りの通路。松明の灯りが、壁に影を落としている。ひんやりとした空気が肌を刺す。石の壁には苔がびっしり生えていて、かび臭い匂いが鼻をつく。天井から水滴が落ちてくる音が、ぽたり、ぽたりと反響していた。

私は剣の柄を握りしめながら、周囲を警戒していた。初めての实战任務。緊張で、心臓がうるさい。

（大丈夫。訓練でたくさん練習した。私にだってできる）

自分に言い聞かせる。カイル隊長の後ろ姿を見つめる。この人がいれば、大丈夫。そう思っていた。

遺跡の奥に進むにつれて、空気が変わってきた。何かがある。肌がかぴりかぴりする。松明の炎が、風もないのにゆらりと揺れた。

カイル隊長が足を止めた。

「……気をつけろ。この先に何かいる」

全員が緊張で息を呑んだ。その時——声が聞こえた。

（——助けて）

小さな声。か細い、消え入りそうな声。壁の向こうから聞こえる。  
（助けて……誰か……）

周りを見た。先輩たちは何も反応していない。カイル隊長も、気づいている様子がない。私にだけ聞こえている？

（……でも、誰かが助けを求めている）

考えるより先に、身体が動いていた。声のする方へ——壁の奥に、淡い光が見えた。そこに手を伸ばした瞬間——

「おい、何をして——」

カイル隊長の声が聞こえた。でも、もう遅かった。指先が光に触れた瞬間——轟音とともに、床から魔法陣が浮かび上がった。

「きゃあっ！」

声なんて最初からなかった。——全部、罨だった。しまった、と  
思った瞬間。強い力で、突き飛ばされた。

「っ——！」

地面に転がる。顔を上げると——カイル隊長が、私を庇って魔法  
陣の中に立っていた。

「隊長っ！」

光が、カイル隊長を包み込んでいく。眩しすぎて、目を開けてい  
られない。やがて光が収まった時——カイル隊長は、膝をついてい  
た。

「隊長！大丈夫ですか！」

駆け寄ろうとして、止められた。

「来るな」

低い声。いつもの冷たい声じゃない。何かを堪えるような、絞り

出すような声。

「で、でも——」

「来るなど言っている」

カイル隊長がゆっくりと立ち上がる。私は見てしまった。カイル隊長の首筋に——赤紫色の紋様が浮かび上がっているのを。複雑な模様が、脈打つように明滅している。

「隊長、首に何か——」

「問題ない」

カイル隊長が、首筋を手で覆った。でも、隠しきれしていない。

「……気にするな。任務を続行する」

カイル隊長の声は、いつも以上に冷たかった。額に汗が滲んでいく。呼吸も、わずかに乱れている。明らかに、普通じゃない。でも、それ以上聞くことは許されなかった。

「先に進むぞ。遅れるな」

カイル隊長が歩き出す。私たちは、黙って従うしかなかった。

任務は、なんとか完了した。中級の魔物を討伐し、遺跡の調査も終えた。でも、カイル隊長の様子は明らかにおかしかった。帰り道、馬を走らせる間も、額の汗が止まらない。時折、苦しそうに眉を顰める。首筋の紋様は、服の下に隠れているけど——きつと、まだそこにある。

(私のせいだ……)

罪悪感で、胸が潰れそうだった。

拠点に戻ると、カイル隊長は真っ直ぐに自室へ向かった。

「本日の任務報告は明日でいい。各自、休息を取れ」

それだけ言い残して、去って行った。先輩隊員たちは、顔を見合  
わせた。

「隊長、大丈夫かな……」

「あの紋様、見たことないな。何かの呪いか？」

「分からない。でも、かなり辛そうだった……」

小声で話し合う先輩たち。私は、その場に立ち尽くしていた。

(……隊長に何かあったら……私……)

あの罨に近づいたのは、私。庇ったのは、カイル隊長。つまり、あの紋様が刻まれたのは——私のせいだ。

自室に戻っても、眠れなかった。天井を見つめながら、ずっと考えていた。あの紋様は何なのか。カイル隊長は大丈夫なのか。私に、何かできることはないのか。

気づいたら、部屋を飛び出していた。カイル隊長の部屋の前に立つ。もう深夜だ。普通なら寝ている時間。でも——部屋の中から、微かに音が聞こえる。荒い呼吸。何かを堪えるような、低い呻き声。

「隊長……?」

ノックする。返事がない。

「隊長、入ります」

扉を開けた。

部屋の中は、暗かった。月明かりだけが、窓から差し込んでいる。その光の中に——カイル隊長がいた。

ベッドの端に腰かけて項垂れている。いつも完璧に結われている紺色の髪が、乱れて肩に落ちていた。服の前が開いていて、首筋から胸にかけて広がる紋様が、赤紫色に脈打っている。額から汗が滴り落ちて、膝の上に握りしめた拳に落ちていた。

「……なぜ……お前がここに……」

掠れた声。顔を上げない。いつもの冷たさはない。絞り出すような、苦しげな声。

「隊長、大丈夫ですか……!?!」

「来るな。出ていけ」

「でも——」

「出ていけと言っている」

カイル隊長がようやく顔を上げた。銀色の瞳が、熱に浮かされたように潤んでいる。額に汗が滲んで、頬が紅潮している。荒い呼吸。苦しげに歪んだ眉。こんなカイル隊長の顔、初めて見る。

「隊長……」

「……帰れ」

「帰りません」

「……命令だ」

「命令でも、帰りません」

声が震えた。でも、引かなかった。目の前で苦しんでいる人を置

いて帰るなんて、私にはできない。

「あの罨に近づいたのは私です。隊長がこうなったのは、私のせい  
です」

「お前のせいじゃない」

「私のせいです。だから——せめて、看病させてください」

「……」

「お願いします」

カイル隊長は、答えなかった。拒否もしなかった。黙ったまま、  
また顔を伏せた。

私はそれを許可だと受け取って、看病用にと持ってきていた手拭  
いを手に取った。

カイル隊長の前に立つ。ベッドに腰かけている隊長を、見下ろす  
形になる。こんなに近くで見るのは——雨の日の訓練以来だ。あの

時とは、状況が全然違うけど。

「……拭きますね」

返事はない。私は、そっと手拭いをカイル隊長の額に当てた。

——熱い。

熱、とかいうレベルじゃない。燃えているみたいだ。

「隊長、すごい熱……」

「……問題ない」

「問題ありますよ……こんなの……」

額の汗を拭う。こめかみを伝って落ちていく雫を追って、手拭いが頬に移る。カイル隊長が、僅かに身じろぎした。

「……」

無言だったけれど、拒まれてはいない。

頬から顎のラインを拭いて、首筋に降りる。ここも汗だくだった。

紺色の髪が張りついている。それを避けるように手拭いを当てて

「っ……」

カイル隊長の身体が、びくりと震えた。

「す、すみません、痛かったですか？」

返事はなく、苦しそうに肩を上下させている。

首筋を拭いていく。紋様のすぐ横を手拭いがなぞる。赤紫色の紋様が、脈打つたびに僅かに熱を増している気がした。触れたらどうなるんだろう。気になったけど、怖くてその周りは避けた。

鎖骨まで降りて、また上に戻る。耳の後ろの汗を拭こうとして、手拭いを持ち替えた。その拍子に——素手の指先が、カイル隊長の首筋に触れた。

「——っ」

カイル隊長の呼吸が、一瞬止まった。

「あ、すみません——」

やっぱり、紋様の部分が痛むのかもしれない。今度はより一層気をつけながら耳の後ろを拭く。鎖骨を拭く。首筋を、もう一度拭く。丁寧に行っているつもりだった。ただ汗を拭いているだけ。それだけのはず。なのに——カイル隊長の呼吸が、どんどん荒くなっていく。

「……もういい」

「でも、まだ——」

「もういいと言っている」

低い声。でも、さっきの「帰れ」ほどの力がない。

「すぐ終わりますから」

開いた服の隙間から見える胸元も、汗で光っていた。鍛え上げら

れた身体。その上を手拭いが滑っていく。

胸の中央を拭いていると、手拭いが紋様の端に触れてしまった。

「……っ、ぐ……」

カイル隊長が、低く呻いた。膝の上の拳が、白くなるほど握りしめられている。

「す、すみません。私、不器用で……」

「……触るな」

「え——」

「そこに……触るな……」

声が震えている。歯を食いしばって、何かを、必死に堪えているみたいだった。

「……すみません、また、ここの紋様に触っちゃって……痛かったですか？ここ避けて——」

私は手拭いの位置を変えようとして、少し身を屈めた。カイル隊長との距離が、さらに近くなる。

その時——気づいた。

カイル隊長の、膝の間に。

服の下で——明らかに、膨張しているものがあつた。

「……あ」

声が、漏れた。

気づかなかつたふりは、できなかつた。至近距離で、目に入ってしまつた。カイル隊長が、顔を背けた。

「……何も言うな」

「……」

「出ていけ。今すぐ——」

「隊長、これ——」

頭では知らぬふりして出ていくのが最善だとわかっているのに——私の口が、勝手に言葉を発していた。

「これが……紋様の、症状なんですか……？」

「……」

「ずっと、こうなって……だから、苦しかったんですか……？」

カイル隊長は答えなかった。答えないことが、答えだった。

(……そういうことだったんだ)

全部——繋がった。

恋人がいたことはない。でも、男の人の身体がどういう時にあなるのかくらいは知識として知っている。——ただ、こうして目の当たりにするのは初めてだった。

あの紋様が、カイル隊長の身体にそれを引き起こしている。抑えようとしても抑えられないほど強く。隊長は、ずっとこれに一人で

耐えていたのだ。誰にも助けも求めずに。

そう思うと、胸がぎゅつと締め付けられた。

「隊長、私——」

「何も言うな。帰れ。これは俺の——」

「ここ……冷やしたら、楽になりますか」

「……は？」

私は手拭いを水差しに浸して、絞った。そのまま手を伸ばしていた。ただ、楽にしてあげたかった。それだけだった。冷たい手拭いを当てたら、少しは楽になるかもしれない。そんな、看病の延長みたいな気持ちで——手拭い越しに、そこに、触れた。

「——っ」

カイル隊長の全身が、震えた。

——硬い。手拭い越しなのに、分かる。熱くて、硬くて、脈打つ

ている。

(あ——)

なんだか急に恥ずかしくなってきた、自分が何をしているのかを認識した時にはもう遅かった。

カイル隊長の手が、私の手首を掴んでいた。

強い力。骨が軋むくらい。

「た、隊長——」

顔を上げて——息が、止まった。

カイル隊長の銀色の瞳は、熱に浮かさされていて、どこか危うい色を孕んでいる。獣みたいだと思った。首筋の紋様が、一際強く脈打っている。赤紫色の光が、鼓動に合わせて明滅する。

「た、隊長……?」

返事はなかった。

掴まれた手首を引かれた。身体が、前のめりに倒れる——ベッドの上に。

「きゃっ——」

背中がシートに沈む。カイル隊長が、覆いかぶさっていた。

カイル隊長は片手でやすやすと私の両手首を頭の上で押さえつける。そして——もう片方の手が、私の顎を掴んだ。強制的に上を向かされる。

至近距離。カイル隊長の顔が、すぐ目の前にある。荒い呼吸が、顔にかかる。銀色の瞳が、私を射抜いている。

——なのに、カイル隊長は今、私を見ていない。

「隊長、待っ——」

唇を、塞がれた。

乱暴なキスだった。唇を割って、舌がねじ込まれてくる。

「ん~~~~ツツ！」

舌を吸われて、口の中を暴かれる。味わうとかそういうんじゃない。貪っているかのように。そして、顎を掴む手が、下に降りてくる。カイル隊長の舌が首筋を這って——  
がぶっ。

「いっ——！」

首筋を、噛まれた。

キスマークとかそんな生易しいものじゃない。歯が食い込んでい  
る。獣が獲物に噛みつくみたい——深く。

「い、た……っ！隊長っ、痛——」

声が出た。悲鳴に近い声。

その瞬間——カイル隊長の身体が、ぴたりと止まった。

噛みついた歯が、ゆっくりと離れていく。首筋を押さえつけてい

た唇が、震えながら離れる。

「……っ」

覆いかぶさったまま、カイル隊長が硬直していた。

その全身が、小刻みに震えている。両手首を押さえていた手が

——離れた。

カイル隊長が、私の上から飛び退くように離れた。ベッドの端に壁に背をぶつけて、そのまま座り込んだ。

「……っ、くそ……」

低い声。自分を呪うような声だった。

項垂れる紺色の髪の毛の隙間から、銀色の瞳が覗いている。——正気に戻った目。その目に、恐怖と自己嫌悪が滲んでいた。

「……すまない……」

絞り出すような声だった。

「……っ、俺は……」

手が、震えていた。自分の手を見つめている。さっき私を押さえつけた手を。

「……出ていけ。頼む。もう——俺のそばに来るな」

その声に、いつものような厳しさはなかった。

私は、ベッドの上で身体を起こした。心臓がまだばくばくいつている。手首が痛い。首筋が、じんじんする。噛み跡から、少しだけ血が滲んでいた。

怖かった。押し倒されて、襲われて、本当に怖かった。

でも——今、目の前にいるカイル隊長を見て。壁際で震えている姿を見て。自分の手を見つめて、どこか壊れそうな顔をしているこの人を見て。

怖さより——この人を苦しみから解放してあげたいという思いが

優った。

こうなることを分かっていたから「帰れ」と言い続けたのだ。私を傷つけることを、恐れていたから。

「……隊長」

「来るな」

「隊長」

「来るなと言って——」

「責任、取らせてください」

カイル隊長の動きが、止まった。

ゆっくりと、顔が上がる。銀色の瞳が、私を見ている。正気の日。苦しみと困惑が入り混じった、カイル隊長自身の目だ。

「……何を……言って……」

「私のせいで、隊長はこうなりました」

声が震えた。でも、目は逸らさなかった。

「私が罠に近づかなければ、隊長が呪いを受けることもなかった。今こうやって……苦しむことも、なかった」

「……それは——」

「さっき、何をされるか——私、ちゃんと分かってました」

首筋の噛み跡に、指が触れた。じんじんする。でも、この痛みが——カイル隊長がどれだけ限界だったかを教えてくれている。

「責任、取らせてください」

そう言って、私は隊長の頬に手を添えて、自ら唇を重ねた。

カイル隊長は、動かなかった。

唇が触れているだけ。返してこない。石みたいに固まったままだ。

(……やっぱり、余計なことだったのかな)

胸がちくりと痛んで、唇を離そうとした。

けれど、その瞬間——カイル隊長の首筋が、赤紫色に脈打ったのが、視界の隅に映った。

頬に添えていた手首を掴まれた。強い力で引かれて、背中がシーツに沈む。カイル隊長が覆いかぶさってきた。見上げた銀色の瞳に、さつきと同じ光が灯っている。理性の消えた、獣の目。

——私のキスが、引き金を引いてしまった。

また、唇を塞がれた。さつきより深く、口内を蹂躪される。

じゅるっ♡ちゅぷ♡

「ん……っ♡」

カイル隊長の舌が、私の舌を絡め取る。吸い上げられて、口の中を好きなように暴かれていく。唾液が混ざる音が、静かな部屋に響いた。

ちゅる♡れろ♡じゅるっ♡♡

「んむっ♡んう……っ♡♡」

息継ぎのタイミングがない。顎を掴まれて角度を変えられる。歯列をなぞられて、上顎を舐められて、舌の裏まで舌先で探られる。

れろれろ♡♡じゅるるっ♡♡

「んんっ……♡♡んう……っ♡♡」

苦しい。でも、離れられない。離してもらえない。やっと唇が離れた時には、私は涙目で荒い呼吸を繰り返すことしかできなかつた。

「はあっ……はあっ……」

カイル隊長を見上げる。銀色の瞳が、熱に浮かされたように潤んでいる。いつもの冷静さなんて、どこにもない。またすぐに唇を塞がれた。今度はもっと乱暴に。歯がぶつかると、激しく。

がつっ♡♡じゅるるっ♡♡

「んむっ……♡♡んうっ……♡♡」

舌を吸われて、噛まれる。唇も噛まれる。痛いくらいなのに、身体が勝手に熱くなる。

キスしながら、カイル隊長の手が動いた。私の服に手がかかる——と思った瞬間。

びりっ。

「えっ——」

服が、破られた。ボタンが弾け飛んで、床に転がる音が聞こえた。躊躇いなんてなかった。下着にも手がかかって——また、びりっと破られた。

「ひっ………♡」

胸が露わになる。外気が肌に触れて、身体が震えた。

カイル隊長の目が私の胸に吸い寄せられる。そして——大きな手が、胸を鷲掴みにした。

ぐにっ♡

「んあっ……♡♡」

優しさなんて、欠片もない。揉むというより、握り潰すみたいに。形が変わるくらい、強く。

ぐにぐにっ♡♡むにゆうっ♡♡

「あっ♡んっ♡隊長っ……♡♡」

乱暴なのに、痛いはずなのに——身体の奥が疼く。両方の胸を、両手で好き放題に揉みしだかれる。指が食い込んで、形が歪んで、それでもまだ足りないみたいに力が込められる。

もみっ♡ぐにゅっ♡♡

「やっ♡ひっ♡♡そんな、んああ……っ♡♡」

隊長の指が確かめるように乳首の先端をすりすりと摩る。そうして、先端を口に含んだ。

「ひゃっ……♡♡♡」

舐めるといふより、貪る。舌で転がして、吸い付いて、歯を立てて。

じゅるっ♡ちゅうっ♡かりっ♡かりかりっ♡

「あっ♡♡♪んっ♡♡やあっ……♡♡」

甘い痺れが背筋を駆け上がる。片方を口で責めながら、もう片方を指で乳首の先端を引っ掛かれる。

「ひあっ♡♡それえ、カリカリやめてください……っ♡♡」

だめ、と言っても止まらない。もつと激しくなっていく。乳首を引っ張られて、強く吸われて、歯で甘噛みされて。先端が唾液ででられてらと光ってる。吸われるたびに背中が反って、子宮が疼いて腰が浮く。

っんっ♡ちゅうっ♡♡かりかりっ♡♡

「あっ♡♡ジンっ♡♡やあ……っ♡♡♡」

(いつもの隊長じゃ、ない……っ)

こんなに激しいなんて。こんなに余裕がないなんて。あの氷の隊長が、私の身体を貪っている。

不意に、カイル隊長の顔が上がった。銀色の瞳と、目が合う。熱に浮かされた目。でも、その奥に——苦しそうな色が見えた。

カイル隊長の唇が、何か言いかけて——閉じた。言葉にできないみたいだった。謝りたいのか、止めたいのか、止められないのか。全部、混ざったような、そんな表情。

私は、その顔に手を伸ばした。頬に、触れる。汗ばんだ肌。——  
やっぱり、すごく熱い。

「……大丈夫です」

声が震えたけど、ちゃんと口にする。

「私は、逃げません。だから——」  
続きは、言えなかった。カイル隊長が、また唇を塞いできたから。さつきより少しだけ——ほんの少しだけ、優しい気がするキスだった。

でも、それも一瞬で。すぐに、また獣のような激しさに戻る。唇が首筋に落ちて、鎖骨を舐められて、胸を通り過ぎて——さらに、下へ。

「隊長……？ あっ……どこ……」  
お腹を舐められる。へそを通り過ぎて、さらに下。下着ごとズボンを一気に剥ぎ取られた。

「やっ……♡」  
一番恥ずかしいところが、晒される。夜風が触れて、ひんやりとそこが濡れているのが——自分でも分かった。

カイル隊長の顔が、そこに近づいてくる。

「まっ、待って——そこは——」

その声は、今の隊長には届かなかった。

両脚を掴まれて、大きく押し広げられ、逃げ場がない。

そして——舌が、直接触れた。

べろっ♡

「ひあっ……♡」

下から上まで、一息で舐め上げられた。

じゅるっ♡れろれろっ♡♡

「あっ♡やっ♡そこっ……♡♡」

まるで、濡れたそこを舐めとるように何度も何度も舌を這わせている。そして、割れ目を、舌先でこじ開けるみたいになぞられる。